

する **Method A** の検討と、我国各地のオゾン鉛直分布の季節変化 (20分)

昨年発表した **Method A** の図的解法の密度を検討し、種々の太陽高度に対するドブソン分光器の観測誤差およびオゾン全量の観測誤差、さらに最下層で仮定するオゾン量を変えた場合、の鉛直分布計算結果に及ぼす影響をしらべた。

次に、館野・札幌・鳥島・鹿児島・マーカスの反転資料を使ってオゾン鉛直分布の季節変化をしらべた。マーカスでは24km以上のオゾン量は夏に max を示し、鳥島・鹿児島・札幌では12~24km 間のオゾン量の max が全量の max (3.4月) より先行し、24~36km 間の max は全量の max よりおくれる傾向が見られる。館野では、12~24, 24~36km 間のオゾン量は全量の季節変化と位相を同じくする。

11. 内川規一 (気象庁高層) : 高層における電気伝導率および電位傾度の変動について (15分)

高層の電気伝導率は高緯度に行くに従って同一高度ではその値が増加することは宇宙線強度の変動により理解される。しかし4ヶ所で得られた資料を統計してみると、500mb 以上の高度では上述の事柄を裏付けているが、この高度以下では4ヶ所とも殆んど同一の値を示している。この事実を気温の変動より考察した結果について述べ、更に電位傾度及び電気伝導率の季節変化についても述べたい。

12. 北岡竜海 (気象庁高層) : **I Q S Y** の観測計画 (30分)

太陽活動が最も弱いと考えられる1964年4月から1965年12月までの **I Q S Y** 期間における観測計画の構想をお話して各界の御批判をお伺いしたい。

生気候に関する研究会

生気候に関する研究を国際生気候、生気象学会日本支部と環境生理集談会との共催で開きます。演題提出希望の方は御申込み下さい。

日 時 : 昭和36年9月2日 (土曜日) 午前9時より

会 場 : 比叡山ホテル

(京都市左京区比叡山一本杉)

切 込 : 7月17日必着

申込先 : 気象研究所 神山恵三

理事会便り (一)

第15回常任理事会議事録

日 時 昭和36年5月12日 (金) 16.30~20.00

場 所 神田学士会館

出席者 正野、岸保、桜庭、吉武、根本、藤田、淵各理事 (順序不同)

決 議

1. 岡田賞および学会賞受賞者候補者推薦委員は次のとおりお願いすることになった。

昭和36年度岡田賞受賞候補者推薦委員会審査委員

寺田 一彦 (委員長)

今井 一郎

堀内 剛二 (幹事)

岸保勘三郎

昭和37年度学会賞受賞候補者推薦委員会審査委員

前記四氏

沢田 竜吉 (帰国が遅れる場合は山本義一)

2. 気象集誌編集委員に新に次の諸氏をお願いすることとなった。

増田 善信

曲田 光夫

丸山 晴久

関原 壘

石原 健二